

上野千鶴子

「教育・ジェンダー・共生

-- あらゆるハラスメントを乗り越えるために」

こんにちは。「おひとりさま」の上野千鶴子でございます。

今年の東京大学入学者の女子率は18%でした。入試不正のせいではなく、親が娘に教育投資をしないから受験者が増えないのです。日本以外の先進国では女子の大学進学率が高い傾向があります。かつてフランスの研究者は、娘には労働市場と結婚市場の二つの投資先があり、結婚市場の投資効率のほうが高いから、女子の進学先が教養系に偏るのは合理的選択だと言いましたが、その時代とはもう事情は変わっています。今では東大卒の女子も、就労するのは当然、いかなる働き方をするかを問うようになりました。その結果、90年代以降、女子の進学先として実学・資格志向が顕著です。文系では法学部、理系では医学・保健系に集中し、工学部・経済学部は増えません。東大女子には娘の進学を後押しする母がいて、その多くはOL経験を有し、職場で女がどんな扱いを受けるか、骨身に沁みて知っているからです。工学・経済という分野は「組織人」にならない限り上昇できない、だから医者と弁護士という高給版“手に職”志向を娘に薦めるのでしょう。

私は今日、皆さんにこの話をどうしてもしたいと思って来ました。今やあらゆる分野で「女を増やせ」が国策ですが、この過少代表制の是正は手段であって目的ではない。ポスト構造主義のジェンダー論を研究してわかったのは、ジェンダーが非対称な権力概念であること、従って女性が男性のように支配者になるのがジェンダー平等のゴールではないこと、私たちが求めているのは「違っていても差別されない権利」だということです。今日のテーマ「共生」とは、「他と違っていても差別されない権利を一人一人が持つこと」です。依存的な存在や弱者を排除せず、尊重する社会を創ることです。ハラスメントとは、職務遂行のために地位に付随する権力を、職務の範囲を越えて濫用することを言います。上司には部下、教師には生徒、親には子ども、介護職員にすら年寄りを思うようにしたいという、権力の濫用への誘惑があります。それを抑制する訓練を、女は育児や介護経験の実践の中から学ぶことができました。「ケア」という非暴力を学ぶ実践に男たちを巻き込み、社会がそれを分かち合う方向に持っていきたい。国策で女を増やせということよりも、私たちが最終的に到達したい人間の安全保障、安全・安心に生きられる社会を目指して、その実現に向かって進んでゆきたいと思います。